

未来の足音

早稲田大学高等学院

藤倉鼓太郎

「本当に、こんなことが起こるのか」私は、目の前の光景を簡単に受け入れることができなかった。運転席に人が乗っていない無数のタクシー。車内は妙な静寂に包まれており、かすかな走行音だけが鳴り響く。単なるタクシーではなく、何か別の未来の乗り物に乗っているような感覚がした。「この奇妙な乗り物が、ちゃんと私を目的地まで連れて行ってくれるだろうか？」そんな一抹の不安を抱えながらも、私を乗せたタクシーは淡々と道を進んでいく。旅先のアメリカで自動運転タクシ

ーに乗った経験は、生涯にわたって忘れることができないだろう。

アメリカ西海岸のサンフランシスコの市街で、ケーブルカーに乗っていた時のことだ。その日は道が特に混んでおり、私は何気なくすれ違う車を見ていた。私は妙な違和感を覚えた。ゆっくり進むタクシーに人が乗っていないのである。私は何度も目をこすった。時差ぼけをしているのではないかとも思った。しかし確かに、運転手がいるはずの前方座席には誰もおらず、ハンドルだけがひとりで回っていた。まるで腕の良い運転手が運転しているかのように。その車は、古き良き町並みが残るサンフランシスコで、強烈な存在感を放っていた。

私はおもむろに携帯を取り出し、かすかな恐怖心を抱きながらも、そのタクシーを予約してみることにした。それまで、自動運転など空想の話だと思っていた。実際に予約確定のボタンを押したときでさえ、にわかには信

じられなかった。スマホの画面には、タクシーの位置情報や目的地までの経路、到着予想時刻などがすべて表示される。落ち着かないので、近くのカフェで待つことにした。窓辺でコーヒーを飲んでみると、「あと五分で到着します」という通知が届き、いよいよその時が近づいていると実感した。

五分後に外に出ると、もう目の前にタクシーが到着していた。到着予想時刻ちょうどである。ボタンを押すとドアが自然に開き、私はいつも通りに車に乗り込んだ。内装は普通のタクシーと変わらない。一目でわかる違いといえば、「運転手がない」ことだけである。乗車してからは誰とも会話することがなく、ディスプレイをいじるだけであった。出発前から、何か別の乗り物に乗っているような感じがした。

「まだ、出発しないのか」と外の景色を見ると、既に車は走り出していた。走行音は気づかないくらい静かで、快適である。混雑して

いる道や狭い道などの、運転難易度が高い道でも難なく走行する。ブレーキがかかるタイミングも完璧で、人間が運転しているときよりよっぽど滑らかだ。乗車する前の緊張感からは一転して、想像以上の快適な空間の中で、くつろいでいる自分がいた。

ふと、タクシーの窓から外の風景を眺めてみた。そこにはサンフランシスコ特有の、ケールカーや急坂、歴史的な港町の景色があった。その中を、静かに走っていく無人タクシー。私は、まるで未来から来たタイムトラベラーになったかのような気持ちになった。

もし、この自動運転技術が広く日本各地で普及されたら、世の中はどう変わるのだろうか、失業するタクシー運転手はどれだけいるのか、法整備はどう進むのか。技術面においては想像以上に安全かつ快適なもの、大衆への信頼性はいまだに薄いだらう。実際に私も自動運転タクシーに乗る前は、恐怖感を抱いていた。

ここでふと思いついたのが、かつて鑑賞した一本の映画である。その映画では、人工知能が人間の仕事を奪っていき、世の中が大きく変化していくというストーリーであった。映画を観た当時は、「こんなことは絶対に起こらないだろう」と、当時の自分たちとかけ離れた描写を楽しんでいたが、今まさに私の前でその描写が現実になろうとしている。これは、もちろん自動運転タクシーに限られた話ではなく、多くの分野にあてはまることであろう。

さておき、誰にも話しかけられることのないタクシー体験は、便利で快適である一方で、あまりの無機質さにいささか寂しさも感じた。たまに乗るタクシーの中での運転手との何気ない雑談や世間話。運転手とのささいなコミュニケーションや、人間味を感じる空間が恋しくなることもある。このような人間味は、機械では作り出すことのできない唯一無二のものであると感じる。

タクシーは、時間通りに目的地に到着した。決済はスマホで自動的に行われるため、ドアを開けて下車する。タクシーはまるで何事もなかったかのように、街中に走り去っていった。私は自動運転タクシーに乗って感じたことがある。それは、便利さと引き換えに大切なものが失われるということだ。技術が進歩することで快適性はいくらかでも向上する。しかし、人と人の交流が生む温かさや、心地よさは、機械では絶対に生み出すことができない。機械に頼りがちなこの世の中で、私たちが本当に大切にすべきものは何だろうか。便利さの陰に隠れている「人間味」こそ、見失ってはいけない大切なものだと感じた。

貴校後、この日本で自動運転タクシーを見ることはない。しかし、サンフランシスコで私がした体験から、確かに未来がすぐそこまで来ていることを実感させられた。この日本にも、二〇二六年初頭に自動運転タクシーが走るようだ。一方で、このような現代社会の

中で、私たちがどのように「人間味」を残していくかが、重要であると強く思う。あの奇妙なタクシーに乗った日から、無意識にずっとそのことを考えている。

(東京都世田谷区)